

# 木戸 孝允(桂小五郎)の生涯

渡辺 幸太郎

## はじめに

木戸孝允(桂小五郎)は維新の三傑とか幕末の三傑といわれ長州藩の代表的な人物とされているが、はたして実際はどうであつたかを検証してみたいと思います。

幕末の三傑とは薩摩の西郷隆盛・大久保利通・長州の木戸孝允(桂小五郎)である。長州には吉田松陰の開いた松下村塾があり木戸孝允を始め、蛤御門の変で自害した久坂玄瑞(松陰の妹・文が夫人)や結核で死亡した高杉晋作などがいた。

木戸 孝允 / 桂 小五郎(きど たかよし / かつら ことろう、天保四年六月二六日(一八三三年八月十一日)―明治十年(一八七七年)五月二六日)は、幕末から明治時代初期にかけての日本の武士、政治家。名の孝允は「こういん」と有職読みされることもある。位階勲等は贈従一位勲一等。

長州藩士で、明治初期における「長州閥」の長(おさ)と認識されることが多い。幕末期には、桂小五郎として知られていた尊王攘夷派の中心人物で、薩摩藩の西郷隆盛・大久保利通とともに「維新の三傑」「維新の十傑」として並び称せられる。

妻は、幕末動乱期の命の恩人かつ同志でもある京都の芸妓幾松(木戸松子)

## 木戸 孝允(桂小五郎)名言集

事をなすのは、その人間の弁舌や才智ではない。

人間の魅力なのだ。

(概略) 吉田松陰の弟子、長州正義派の長州藩士、練兵館塾頭の剣豪、留学希望・開国・破約攘夷の勤皇志士、長州藩の外交担当者、帰藩後は藩庁政務座の最高責任者として活躍する。特に志士時代には、幕府側から常時命を狙われていたにもかかわらず果敢に京都で活動し続けた。幾度となく芸妓幾松に命を助けられている、坂本龍馬がお龍に助けられたように。

維新後、総裁局顧問専任として迎えられ、当初から「政体書」による「官吏公選」などの諸施策を建言し続けていた。文明開化を推進する一方で、版籍奉還・廃藩置県など封建的諸制度の解体に務め、薩長土肥四巨頭による参議内閣制を整えた。海外視察も行い、帰朝後は、かねてから建言していた憲法や三権分立国家の早急な実施の必要性について政府内の理解を要求し、他方では新たに国民教育や天皇教育の充実に務め、一層の士族授産を推進する。長州藩主毛利敬親、明治天皇から厚く信頼された。

木戸は開明的であったが、急進派から守旧派までが絶え間なく権力闘争を繰り広げる明治政府の中にあっては、心身を害するほど精神的苦悩が絶えなかった。西南戦争の半ば、出張中の京都で病気を発症して重篤となったが、夢うつつの中でも西郷隆盛を叱責するほどに政府と西郷双方の行く末を案じながら息を引き取った。

木戸 孝允 ( 桂小五郎 ) 名言集

人の巧を取って我が拙を捨て、

人の長を取って我が短を補う。

( 自分の未熟さや短所を補うためには、人の優れたところを取り入れるべきだ。 )

## (生涯) 剣豪 桂小五郎

弘化三年 (一八四六年)、長州藩の師範代である柳生新陰流剣術内藤作兵衛の道場に入門している。嘉永元年 (一八四八年)、元服して和田小五郎から大組士・桂小五郎となり、実父に「もとはが武士でない以上、人一倍武士になるよう粉骨精進せねばならぬ」ことを言い含められ、それ以降、剣術修行に人一倍精を出し、腕を上げ、実力を認められ始める。嘉永五年 (一八五二年)、剣術修行を名目とする江戸留学を決意し、藩に許可され、長州藩に招かれていた神道無念流の剣客・斎藤新太郎ほか5名の藩費留学生たちに随行し私費で江戸に旅立つ。

江戸三大道場の一つ、神道無念流練兵館 (斎藤弥九郎) に入門し、新太郎の指南を受ける。神道無念流剣術の免許皆伝を得て、入門一年で塾頭となった。大柄な小五郎が、得意の上段に竹刀を構えるや否や「その静謐 (せいひつ) な気魄 (きはく) に周囲が圧倒された」と伝えられる。小五郎と同時期に免許皆伝を得た大村藩の渡辺昇 (後に、長州藩と坂本龍馬を長崎で結びつける人物) とともに、練兵館の双璧と称えられた。

幕府講武所の総裁・男谷精一郎の直弟子を破るなど、藩命で帰国するまでの五年間、練兵館の塾頭を務めおおせ、その間、剣豪の名を天下に轟かせる。大村藩などの江戸藩邸に招かれ、請われて剣術指導も行った。また、近藤勇をして「恐ろしい以上、手も足も出なかったのが桂小五郎だ」と言わしめたという逸話がある。

一説には、安政五年 (一八五八年) 十月、小五郎が武市半平太や坂本龍馬と、桃井道場の撃剣会で試合をしたとされるが、当時の武市・坂本は前月から土佐藩に帰ったままである。。

## 蛤御門の変

八月十八日の政変の不当性が認められない上、池田屋事件まで起こされた長州藩は、小五郎や周布政之助・高杉晋作たちの反対にもかかわらず、先発隊約三〇〇名が率兵上洛し、久坂玄瑞軍が山崎天王山に、来島又兵衛軍が嵯峨天龍寺に、福原元佃軍が伏見に陣取り、朝廷に長州藩主父子や長州派公卿たちの雪冤を迫る。朝廷もそれに応じ、京都守護職を会津藩から長州藩に委ね、(中)と高杉の威嚇で行くが、一橋慶喜から「もしそうしたいのであれば、幕府側は一切朝廷から手を引かせて頂く。お好きなようになされるがよい」と説得され、幕府・会津藩と完全な敵対関係になるまでは考えていない孝明天皇および公卿たちは、躊躇してしまふ。そこで劣勢を回復した中川宮朝彦親王などの佐幕派公卿たちは逆に、朝廷と長州派公卿を介した長州との交渉を打ち切らせ長州軍を挑発して一気に蹴散らしたい幕府側 (一橋慶喜・会津・薩摩守旧派) の意向をそのまま受けて、長州軍の退去を期限付きで最後通告して来た。

長州軍としては武門の名誉に賭けて、何も果たさず、何も戦わずにすげすごと国許まで帰ることはまず不可能である。天皇直訴と集団諫死に賭けた長州先発隊は、まだ瀬戸内海上にいる世子・毛利定

広率いる長州軍本隊二千名に引き上げを要請した上で、蛤御門の変（禁門の変）を敢行する。

来島又兵衛率いる嵯峨天龍寺の長州軍は、会津軍を破り、禁裏に後一步と迫るも、薩摩軍に横腹を付かれ、来島が倒れた後は総崩れとなって、散り散りに敗走する。福原元憊率いる伏見の長州軍は御所に辿り着けず、早々と大阪方面へ退避する。

久坂玄瑞率いる天王山の長州軍は、淀川のぬかるみで出遅れ、御所に辿り着いたときは戦闘がほぼ終わっており、鷹司邸を根城にして天皇に直訴だけは行おうとするが、これもかなわず、久坂たちは自らは大将として自刃し、残りは天王山方面へ退避させる。

## 薩長同盟

長州藩は土佐藩の土方楠左右衛門・中岡慎太郎・坂本龍馬らに斡旋されて薩摩藩と秘密裏に薩長同盟を結ぶ。慶応二年（一八六六年）一月二十二日に京都で薩長同盟が結ばれて以来、桂は長州の代表として薩摩の小松帯刀・大久保利通・西郷隆盛・黒田清隆らと薩摩・長州でたびたび会談し、薩長同盟を不動のものにして行く。薩長同盟の下、長州は薩摩名義でイギリスから武器・軍艦を購入した。

## 明治維新政府内

明治新政府にあっては、右大臣の岩倉具視からもその政治的識見の高さを買われ、ただひとり総裁局顧問専任となり、庶政全般の実質的な最終決定責任者となる。太政官制度の改革後、外国事務掛・参与・参議・文部卿などを兼務していく。明治元年（一八六八年）以来、数々の開明的な建言と政策実行を率先して行い続ける。五箇条の御誓文、マスコミの発達推進、封建的風習の廃止、版籍奉還・廃藩置県、人材優先主義、四民平等、憲法制定と三権分立の確立、二院制の確立、教育の充実、法治主義の確立などを提言し、明治政府に実施させた。

なおこの際に、軍人の閣僚への登用禁止、民主的警察、民主的裁判制度など極めて現代的かつ開明的な建言を、その当時に行っている。

## 五箇条の御誓文

明治元年（一八六八年）三月十四日に布告された五箇条の御誓文において、当初案から、第一条の「列侯会議を興し」を「廣ク會議ヲ興シ（広く会議を起こし）」に改め、新たに挿入させた。

## 岩倉使節団とその影響

木戸は、幕末以来の宿願である開国・破約攘夷つまり不平等条約の撤廃と対等条約締結のため、岩倉使節団の全権副使として欧米を回覧し、予備交渉と欧米視察を進め、欧米の進んだ文化だけでなく、民主主義の不完全性や危険性をも洞察して帰って来る。また、今までの開明急進派の立場を改め、漸進派となる。

しかしながら、欧米と日本との彼我の文化の差は余りにも甚だしかった。かつての征韓論などは引込めて、内治優先の必要性を痛切に感じ、憲法の制定、二院制議会の設置を積極的に訴え、国民教育の充実、天皇教育の充実に積極的に取り組んだ。後に文部卿に自ら就任したのは国民教育を充実させる事を目指したものであった。

西郷らが主張する征韓論や大隈や西郷従道らが主張する台湾出兵には一貫して反対し、またあくま

で農民を不公正な税制と重税から解放するために積極的に推し進めた地租改正や、武士の特権を廃止して彼らに新たな生活の途を探させるための手段として構想された秩禄処分が実行された時には、これに激しく反発した。そして、台湾出兵が決定された明治七年（一八七四年）五月には、これに抗議して参議を辞職している。

明治十年（一八七七年）二月に西南戦争が勃発すると、すぐさま鹿児島征討の任にあたりたいと希望した。また大久保利通は、西郷への鎮撫使として勅使の派遣を希望した。伊藤博文はこれらに反対し、結局、徴兵令による国軍が出勤し、木戸は明治天皇とともに京都へ出張する。

かねてから重病化していた病気が悪化し、明治天皇の見舞いも受けるが、五月二六日、朦朧状態の中、大久保の手を握り締め、「西郷もいいかげんにしないか」と明治政府と西郷の両方を案じる言葉を発したのを最後にこの世を去った。享年 45。

## 死 後

墓所は多くの勤皇志士たちと同じく、京都霊山護国神社にある。また、長州正義派政権時代に山口の居宅だった場所（山口市糸米（いとよね））に木戸神社がある。

晩年、木戸は現在の東京都文京区本駒込五丁目、豊島区駒込一丁目の別宅で親しい友人を招き過ごしたと言われる。当時の庭園が今も維持されている。JR 山手線駒込駅から別邸までの間に木戸坂と命名された坂が残されている。

## おわりに

木戸孝允（桂小五郎）は学問・剣術に優れ、さらに、その瞬間瞬間の適切な状況判断で幕末動乱を生きぬけた、ずばぬけた才能の持ち主である、人は「逃げの小五郎」と呼んだが本人の鋭い感覚にほかならない。維新後は海外視察もし海外事情にも強く新政府の重職にも就き三権分立や憲法作成そして五箇条の御誓文作成に貢献した、しかし反対者も多く、心労となり持病も悪化し明治十年五月二十六日逝去四十五歳まだまだ新政府で活躍できる、若い死であった。

### 木戸孝允（桂小五郎）名言集

大道行くべし、又なんぞ妨げん

（信念をもつて自分の道を突き進めば、その道を妨げるものは何もない）。

### ※参考文献

『木戸孝允遺文集』 東京大学出版

『木戸孝允日記 全三巻』 東京大学出版会

日本の歴史『幕末の英傑』暁教育図書「開国と攘夷」  
世界文化社

松尾正人『幕末維新の個性木戸孝允』

吉川弘文館 2007 年

宮永孝「白い崖の国をたずねて」

岩倉使節団の旅 木戸孝允のみたイギリス』

2007 集英社

歴史リアル『幕末維新入門』洋泉社

日本の歴史「幕末の英傑」暁教育図書